

(様式 3-1)

平成 29 年度 プロジェクト研究費研究実績報告書

平成 30 年 5 月 9 日

代表者 西脇 二葉

研 究 課 題 名	多文化・多言語社会における文化の継承—わらべ唄と育児不安の関係から
研 究 期 間	平 成 2 9 年 4 月 1 日 ～ 平 成 3 0 年 3 月 3 1 日
共 同 研 究 者	長田瑞恵、鈴木晴子、薮崎伸一郎、渡邊孝枝、横井紘子
1. 今年度の研究概要	
<p>本研究では、第一に平成 28 年に実施した育児不安とわらべ唄に関する調査研究を基に長期縦断的データを継続的に検討し、乳幼児の子どもとその親とのかかわり方と育児不安との関連性を明らかにすること、特にわらべ唄教室における親子の様子を継続的に分析することで、親・子どもの発達に及ぼすわらべ唄の影響を明らかにし、併せて、親の親、また、親と子への子育てに使用する言葉の世代間伝達に着目し、子育て文化の継承の構図を描く。そして第三の目的として、日本のみならず、西洋、東洋、アフリカ文化との比較から、国際的視野において日本の子育ての文化的特性を明らかにしようとして試みようとするものである。</p> <p>母親の年齢や子育てに関する背景知識、発達に関する知識が乏しい中でも、わらべ唄を育児の中で活用していくことは容易であると考えられる。したがって、わらべ唄と育児不安軽減との関連やわらべ唄の活用の可能性を検討することは、育児不安に悩み奮闘している母親への現実的に実践可能な育児支援として、非常に意義があると考えた。</p>	
2. 研究の成果	
<p>本研究の 3 つの目的を達成するため、縦断データを以下の 5 つの視点から収集した。従来の研究から、わらべ唄を育児に取り入れることで (1) 母親の子どもへの対応や応答性が変化するか否か、(2) 子どもの行動に変化がおきるか否か、(3) 親子の相互作用の質に変化が生じるか否か (4) わらべ唄を育児に活用することが、母親の育児支援として貢献するのか否かを明らかにする。(5) 上記 4 点が、わらべ唄が伝承されている諸国全般にも当てはまるのか否かを考察しようとしたが、その結果、わらべ唄そのものの定義こそまず必要であるという認識に至り、追加調査を、カナダ在住の日本人家庭への調査に併行して試行した。結果、わらべ唄の定義に関しては、想起されるイメージには、郷愁や思い出の背景が複雑に考察することが明らかとなり、明るく楽しいという育児イメージとは異なる要素が包摂されていることが予想された。唄う際の保護者の情動について、動作や感覚の面での考察の必要性が明らかとなる成果を得た。</p>	
3. 研究成果の公表実績・予定 (年月日、方法)	
<p>公表実績</p> <p>◇論文</p> <p>・「育児中の養育者の子どもへの働きかけの内容と育児意識—自身の母親からの伝承の有無との関連から—」長田瑞恵、西脇二葉、渡邊孝枝、横井紘子、薮崎伸一郎、鈴木晴子『十文字学園女子大学紀要』48 巻—1、15-32 頁。</p> <p>◇予定</p> <p>・ポスター発表「カナダ在住の子育て世代の日本人が持つわらべ唄の印象」西脇二葉、長田瑞恵、於) Huron University, Ontario, Canada, 2018, 08, 21.</p>	